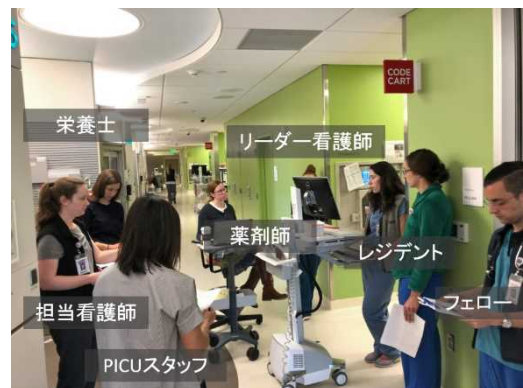


この度、2018年6月から7月にシアトル小児病院との交流において、シアトル小児病院 PICU、CICU で4週間見学させていただく機会を頂きました。この研修において私は、海外の PICU のシステムを見学する、心移植をはじめとする経験したことのない症例や膜型人工肺（ECMO）・多発外傷の診療を見学する、PICU 領域の研究を見学するという目標を事前に掲げて臨みました。

シアトル小児病院の集中治療科は PICU 約 36 床（年間入室数約 2000 例）、CICU 約 16 床と当院に比べて規模が大きなユニットです。医師数はスタッフ 30 名、フェロー15 名で診療を担当しています。日々の診療においては、日勤スタッフ 5 名、フェロー3-4 名、それに Nurse Practitioner が 1-3 名程度で診療にあたります。約 45 床に対しての医師数は少なく、一人当たりが担当する患者の数も多いですが、日本に比べて看護師や薬剤師、栄養士の業務範囲が異なり、また呼吸療法士など呼吸管理を専門に行うスタッフがいるため、医師の仕事の範囲も若干異なります。1 日の日中の業務は 6 時頃からの夜勤者からの申し送り、8 時半からの回診で始まります。

一般的に、国内外を問わず ICU では他科の医師や看護師、薬剤師、臨床工学技士と連携をとりながら診療にあたり、他科の医師やその他の職種との情報共有、意見交換が必要不可欠です。当院では（多くの日本の施設がそうだと考えられますが）毎日他科の医師とカンファレンス室内での回診を行っているのに対し、シアトル小児病院では毎朝関連科の医師、看護師、薬剤師、栄養士および患者家族とベッドサイドでの回診を行っており、その回診形態は大きく異なっておりました。シアトルでは、回診の中で医師だけでなく看護師、薬剤師、栄養士が患者についての presentation を必ず行い、積極的に議論します。病態・治療方針だけでなく患者ケアや社会背景に対しても全職種で共有し、議論を行っており、質の高い議論ができているように感じました。また、家族は希望すれば必ずその回診に参加することができ、また家族も患者の状態について意見を述べ、治療方針について話し合うなど、家族を交えた議論がなされていました。それによって患者家族の病態や治療方針に対する理解が深まり、満足度も高めることができました。一方で、回診にかかる人的・時間的労力は大きく、朝から始まった回診が昼前後まであることもしばしばあります。その間のベッドサイドにおける診療は制限されてしまうため、その間に患者対応が必要な場合に対応する医師の確保が必要になるなど、その他の人的資源が必要という側面があります。

また、シアトル小児病院は「患者の権利」を尊重し、それを掲げている病院でありました。患者家族を交えた回診も然り、すべての病室が個室であり、患者のベッドだけでなく、奥に患者家族がリラックスできるスペースやシャワールームなどが完備されているほか、集中治療の患者が利用することは少ないですが、患者のためのジム、屋上庭園など患者を中



心に考えられた設備が多数あることが印象的でした。写真にあるのは患者や患者家族の権利および患者家族の義務について書かれたパンフレットであり、患者や家族中心の治療を意識し、積極的に実践している病院でした。

症例に関しては、特に膜型人工肺（ECMO）、移植、外傷に興味がありました。残念ながら私の見学期間中のECMO症例は1例のみであり、それほど深くかかわることができませんでしたが、心移植は何例か経験することができ、刺激を受けることができました。外傷症例に関しては、シアトル小児病院では扱っておらず、シアトルのダウンタウン近郊に位置するHarborview Medical Clinicに集約されていました。シアトル小児病院を通じて見学をお願いし、2日間見学させていただくことができました。Harborview Medical Clinicにも重症小児を診るPICUがあり、Seattle Children's HospitalのPICUのスタッフ、フェローがローテーションする形で診療にあたっています。私が見学した2日間は残念ながら症例は少なかったですが、形成外科との熱傷カンファレンスや虐待カンファレンスに参加し、またスタッフから銃社会であるアメリカの銃創の症例の背景も伺いました。銃の規制についてはアメリカでも様々な議論がありますが、こと医療的な観点からはいたたまれない事件・事故が多発しています。小児においてはその親が所持する銃で遊んで暴発、受傷といったケースもあるようであり、アメリカの銃社会における問題点に触れることができました。

研究に関しては、第1週目に私の見学をサポートしてくれたPICUスタッフのDr. Ken Schenkmanの計らいで研究室を見学させていただきました。Ken先生の研究室はワシントン大学内にあり、筋肉内の酸素化を測定することにより体内組織の酸素需要を推し量るものでした。実験の器材を見たり、ショックの病態に関する議論を交わすことができ、非常に有意義な時間でした。

シアトル小児病院で研修するにあたり、シアトル小児病院の多くの方々にお世話になりました。特に当院の中尾院長、国際交流委員長の前田先生、副委員長の田中先生にシアトルの研修に赴くにあたり様々なarrangeをしていただき、シアトルにおいては副院長のDr. Sandy MelzerやMs. Julie Povick、ICUのChiefであるDr. John McGuireに、研修のarrangeに加えてHome Partyや食事に連れて行っていただいたりなど、研修そのものだけでなく、シアトルで研修生活を送るにあたり、様々なサポートをして頂きました。また、集中治療科の先生方には、業務の忙しいなか快く研修に送り出してくださり、感謝の念に堪えません。



Dr. Melzerのご自宅でのHome Party

シアトル小児病院での研修は、私にとって海外の医療に触れる初めての機会でした。異なる文化における医療に対する考え方の違い、システムの違い、職種による業務範囲の違いなど、今までに経験したことない形の医療に触れることで、自分の視野が広がったと感じました。兵庫県立こども病院に帰院後も、今までになかった視点から自分たちの診療を見直し、よりよい診療を目指していきたいと思っています。